
今は勇者もダークサイド寄り

斥侯部隊 隊員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今は勇者もダークサイド寄り

【Nコード】

N5520Y

【作者名】

斥侯部隊 隊員

【あらすじ】

ある日突然、青年は勇者として召喚される。魔王討伐を王様に命令され、旅に出るが支度金を握って即逃走。魔王討伐？知るか。報酬の出ない慈善事業をするほど、俺はお人好しじゃないんだぜえ。

——正直者が馬鹿を見、卑怯者が甘い汁を吸う。そんな外道なコンセプトで描かれる、よくわからない物語。

召喚？マジ勘弁

目が覚めると、異世界だった。

何番煎じだ、と自分でも突っ込みたくなかったが、そんな使い古されたネタをかまさないや今の状況は理解できなかった。

まず、俺は何故か石でできた円形状の台座にパジャマで寝転んでいる。台座を取り囲むように立っている謎の男達は、そんな俺のパジャマに視線を注いでいた。なにこれこわい。

そして男達の中に紅一点、なんだか綺麗なお嬢さんが俺の股間部分、エクスカリバーが TENT を作っている場所を頬を赤く染めて注視していた。やめる見るな。これは生理現象だ。男はみんな朝起きるとこうなるの。

俺は股間部分の TENT をを手で隠しながら、ぼんやりと今の状況を把握し理解した。

——勇者召喚……

ファンタジーな本などでたまに見かける、あのシチュエーションだった。いや股間注視は別として。

取り敢えず、一生懸命 TENT 張りを頑張っている煩惱いっぱいエクスカリバーを宥めつつ、女の人に声を掛ける。

「ここはどこですか」

すると、女の人はやつと俺の股間から目線を外し、ゆつくりと俺の目に合わせてぼそぼそと答えた。

「メ、メノウ王国の王城です。ま、まあ異世界から来たあなた様はご存じではないと思いますけど……」

知らねえよ。どこだよそこ。もう異世界確定じゃねえか。

「異世界……ね。それにしても、来た、ですか。この状況を見れば、来た、ではなく無理やり連れてきた、の方がしつくりきますね」

まず嫌味を放って反応を見る。

すると女の方は、慌てたように言う。

「ご、ご就寝のところ、こちらの都合で勝手に連れてきたことは謝ります。ですが、我が国はいま未曾有の危機に陥っているのです。すいません、それについては後程お伝えします」

未曾有の危機……魔王の侵攻か何かだろうな、と当たりをつける。

それで、俺に魔王を討伐して来いと王様か何かが命じるんだろう。正直言って、面倒くさい。

そういえば、もし俺が勇者としてここに呼び出されているなら、何か能力っぽいものは無いのだろうか。流石にいくら横暴な王様でも、何の力も持たない一般人を魔王討伐に向かわせはしないだろう。

まあ、それは後で確かめるとして、いつまでこの地下室のような空間にいるんだろうか。それを尋ねると女の人は慌てて、

「いいい今すぐ王様の下へ案内します」

後は……

「もしここが異世界だとして、元の世界には戻れないのですか」

それを訊くと、また女の人は、すいません、と言った。どうやらムリらしい。

はあ、とか返事をしながら、俺はもう逃げる算段を立てていた。

魔王討伐？知るか。何で勝手に呼び出された挙げ句、そんな面倒なことまでせにゃなんのだ。

異世界に来たというのなら、自由に生きてやるさ。

十

ここです。少々お待ち下さい。と言い、女の方は恐らく王様が
いるであろう部屋に入っていた。いや、女の方が入っていた扉
を見れば、そこが部屋という言葉に似つかわしくない程大きいこと
が分かった。

一言で表すなら『間』である。恐らく、謁見の間とかそんな感じ
だろう。

俺自身は、よくわからない格好をした男達に囲まれるようにし

て扉の前に立っている。

5分程その状態で待っていると、謁見の間（仮）の扉が開いた。そして、中にいた2人の兵士らしき人に、謁見の間（仮）に招き入れられた。

やっと謎の男達から解放された。

謁見の間（仮）に入ると、まず毛の長いカーペットに驚く。なんぞこれ。寝転がりたい。

流石に王様の前でそんなことをするわけにもいかず、足を止めずに周りを小さく見回す。

なんか凄い。壁際の高さ15mくらいの甲冑は、動き出したりしないんだろか。あの壺は高そうだな。思わず叩き割りたい衝動に駆られるわ。

やがて俺は頭を真っ直ぐに向け、玉座にいる王様を見る。でっぷりと肥えた豚みたいな王様のサイドに控えているのは、宰相か何かか。

俺は玉座から十数m程離れたところで、兵士から王様に跪くように言われた。なんでやねん。取り敢えずおっかないから跪くけど、何か屈辱やわあ。

それで王様から告げられたのは、丸々予想通りの言葉だった。要するに、民が困っているから魔王を倒して来いよ、と。

俺は表面上は絶対服従の構えをとっているが、腹の中ではやは

り逃げ出す算段を立てていた。

へへー、とか有り難き幸せ、とか言ったら向こうも俺を信用するだろ。俺は向こうを信用しないけどね。ヒッヒッヒ。

取り敢えず逃げ出すのは魔王討伐の旅に出てから。恐らく貰えるであろう少くない旅費をパクってしらばっくれやるぜ。ヤバイなんかワクワクしてきた。

朝食

適当に王様の言葉を聞き流し、眠気によりやってくるあくびを噛み殺す。

なんだかやたらと話が長い。この王様は自分の声を聴けば、俺の士気が上がるとでも思い込んでいるんじゃないだろうか。何か一々上から目線だし。手前の声を聴いても、上がるのは逃走に掛ける思いだけだ。残念だったな。

しかも跪いたままの体勢で、王様の高説（笑）を延々と聴かされ続けるのだ。反感を抱くなと言う方がおかしい。

そのままの体勢で20分くらい王様のお話を聴き、疲れているだろう、との王様の言葉でやっと解放された。

疲れてはいるが、その原因の大半はお前のお話の所為だよ、王サマ。

んで、謁見の間から出ると外で待ち構えていた謎の男達に、着いてきて下さい、と言われた。ヤダ。拒否したい。そう思うも、なんだかやっぱり抵抗できそうになかったから素直に着いていく。

3分程歩いて、到着したのは普通の部屋だった。いや、やたらと豪華で普通ではないけどね。

謎の男達は、ここで寝泊まりして下さい、と言い残して去って行った。

取り敢えず中に入り、扉を閉める。辺りを見回して感嘆する。なんか色々と装飾過多でヤバイ。天蓋付きベッドなんて初めて見たよ俺は。

こ、こ、ここで寝ていいんだろうか。シート汚しただけで城を追放されたりしないかな。それはそれでいいんだが。

おっかなびっくりベッドの感触を確かめるように座る。これはやばい。布団に入れば3秒で寝られる。

ベッドに座ったまま色々考える。

——だがそれは故郷への郷愁の念ではなく、恐らく自分が授かったであろう能力についてだ。

俺が勇者だというのなら、光属性とかそんな感じの力なのではないかと思う。

何かいかにも『勇者』って感じで強そうだ。

そういえば王様が、明日から魔法の訓練を行ってもらったことを言っていた気がする。何だか少し楽しみだ。

いや、一度はファンタジーな世界で俺ツエーをやってみたいと思っていたんだ。

とか、そんな事を考えていると、眠気が再び俺を襲う。この眠

気は耐えられない、そう判断した俺は素早く天蓋付きベッドに潜り込んだ。

ベッドの寝心地はやはり最高で、潜って10秒も経たない内に俺の意識は落ちて行った。

+

翌朝、知らない人の声に目が覚める。ベッドから降りると、おはようございます、と声を掛けられた。

声のした方を向くと、また謎の装いをした男がいた。だが、今回は集団ではなく1人の様だ。

取り敢えず、おはようございます、と返しておく。

すると男は頷いて、こちらに歩み寄ってきた。よく見ると、男は手に何かを持っている。

男は、俺の前に来るとその何かを差し出した。どうやら、衣服のようであった。着ろ、ということか。

確かに、パジャマとか薄手だし、運動には向いてないからな。

男が部屋から出て行くと、服を床に広げた。

……これは、意図して初代辺りのドラ○エ主人公ルックにしたのではあるまいか。いや、確かに動き易そうだけどね。

一瞬躊躇ったが、やっぱりそれを着ることにした。パジャマよ

りはマシだろう。

丁度着替え終わった頃、廊下から、朝食の準備が整っております、と聞こえてきた。

分かりました、と応えて部屋を出る。外にはやはり謎の男がいた。

「食堂はこちらにございます。着いてきて下さい」

そう促され、仕方なく頷く。お腹空いたしね。

そこで、近くにいた兵士に訊いてみた。
謎の男に連れられてやってきた食堂は、沢山の人で賑わっていた。食堂に入るところで、謎の男とは別れた。

どうしよう。お腹が空いて何かを腹に入れたい気分だが、どこでご飯は貰えるのだろうか。

そこで、近くにいた兵士に訊いてみた。

「すみません、ご飯ってどこで貰えるんですかね」

俺の問いに対して兵士は、

「ああ、そこだよ。てか、もしかしてあんた噂の勇者さん？」

指で指し示し、親切に場所を教えてくれた。

「ありがとうございます。昨日召喚されたのがそうだというのなら、俺は確かに勇者ですね」

そう返すと、兵士は意外そうな顔になる。

「へえ……。あんた、相当肝が据わってんな。普通、召喚されたばかりの勇者ってのは自室に籠もって3日くらい泣いてるもんだぜ」

「……ええ、普通ならそうなるでしょうね。向こうに未練があるなら、きつとその反応が妥当です。俺は、たまたま向こうに未練が無いからこうして構えていられるんです」続けて俺は言う。「それと、やっぱり俺と同じように異世界から召喚されてしまった人がいるんですか？」

そう質問を投げ掛けると、兵士は困ったように頭を掻き言った。

「すまねえ……。その辺は守秘義務が課せられてて言えねえんだ。まあ、守秘義務を課せられていることを喋るのも本当はダメなんだがな」

そういつて兵士は快活に笑う。

「いえ、何から何までありがとうございます」

「いってことよ。困った時はいつでも頼ってくれよな」

何だこの人いい人過ぎる。

「本当にありがとうございます。あの、お名前を伺っても？」

「俺はベム。ベム・ケーリ。あんたは？」

「俺はマサト・ヤマダ……になるのかな、こっちの世界だと」

魔法訓練とは

取り敢えず食堂で朝食を摂った俺は、食堂から出た地点でうろうろと彷徨っていた。

飯は食ったけど、これから何をすればいいんだろう。

そこで挙動不審にしていると、またしても謎の男が現れて、言った。

「朝食は食べましたね？ では行きましょう。次は魔法訓練です」

「魔法、ですか」

「魔法をご存じですか？」

「知っているというか、俺のいた世界では魔法は空想上のものだしだから、いまいちピンと来なくて……」

そう言う謎の男は、そうですか、取り敢えず着いてくれば解ります、と言って俺に背中を向けてどこかに向かう。俺は慌てて謎の男を追った。

十

俺が謎の男に連れられて来た場所は、外にある訓練場のようなところだった。いや、恐らく訓練場だろう。兵士が剣を交えているのを見れば即座に分かる。

俺も、召喚される前は剣道をやっていた。そこそこ強い方で、県大会で優勝したことも何回がある。

それでも、俺は目の前で闘う兵士に勝てるとは思えなかった。

剣道の戦い方は、実戦向きではない。剣道を習い始めた頃、そう思った。

恐らく、相手が実戦向きの剣を習っていて、それが例え自分より格下でも、俺は確実に負けると言い切れる。

剣道とは、そういう武術だ。

「勇者殿？」

と、いけない。いつの間にか足を止めてしまっていたようだ。謎の男がこちらを怪訝そうな顔で見ている。

「いえ、すいません」

謝罪して、また後を追う。どうやら、魔法訓練とやらはここで行わないらしい。

それからまた少し歩いて、着いたのは屋内だった。体育館を彷彿とさせるような場所である。

広さは一般的な高校の体育館の5倍はある。

そこで、ロープのような物を着た人達が火の玉やら氷の塊やら

を飛ばし合っていた。

縦長の形状の体育館、その壁に沿うように並んだロープの人達が向かい合って『魔法』を撃っている。

「あなたも、今日からここに混じって魔法の訓練をしてもらいます」隣に立っていた謎の男が言って、魔法を撃ち合っている人達に指示を出していたロープ（恐らく隊長かなにか）に向かって歩き出した。

そのまま謎の男は隊長の目の前まで行って、隊長と何事かを交わす。

隊長は、謎の男と話し終わるとこちらに向かって手招きした。来い、ということか。

隊長とかなんか強そうだから逆らわない。俺はよほどの事が無い限り、大きな力には逆らわないのだ。

隊長の前までくると、何かじっと見つめられた。キモい。オッサンに見つめられても抱く感想はそれくらいだ。

「魔力は多いみたいだな」

隊長は俺に言う。

謎の男？また知らん内にどっかに行ってしまったよ。

「そ、そうですね……」

愛想笑いを浮かべて応える。つーか魔力で、よくゲームで見かけるMPとかそんな感じの物か？

面倒だから訊かないけどね。

「君はこれから、私と訓練をしてもらう。魔法を上手く使えるようにする訓練だ」

「はあ……」

そんなことは想定済みである。どうでもいいから早く俺TUEEEEEやらせろよ。

「まず、魔法とは――」

勝手に魔法の講義を始めたオッサン。もうヤダ。

30分後、やっと隊長の魔法講義が終わる。それでは実践だ、と隊長が言い、俺は頷く。

……

『まさかこれ程とは……流石は勇者様だ』

的な展開になるのだろう。非常に楽しみである。

隊長は俺から十数m程距離をとり、魔法を撃ってこい、と言っ

た。

どうやるんだ、と訊くと、手から『血液』を放出するイメージで、と言われた。出来るかボケ。

取り敢えず掌を隊長に向け、目を瞑り掌に意識を集中する。格好は、周りで魔法を撃ち合っている奴らの模倣だ。

とおおお、なんか、掌から出てる気がする。薄らと目を開けると――

――黒いナニかが、にゅっと俺の掌から出てきていた。

魔法訓練とは（後書き）

お気に入り登録してくれた方、本当にありがとうございます。執筆の際、かなり励みになっております。

感想、誤字脱字指摘など、戴けると嬉しいです。

暴走？

キモい。俺が、掌からでる『黒いナニか』に抱いた感想はこれだった。

俺の掌から依然として出てきていた黒いナニかは細長い形状をとっており、長さが100cm程になると、掌を離れ、存外硬質な音をたてて魔法訓練場の床に落下した。

その形と、落下時の金属質な音から鉄パイプを連想する。

隊長の方を見ると、なにやら驚いた表情でこちらを見ていた。

やがて隊長は驚愕から立ち直ると、こちらに歩み寄ってきた。

どうしたんですか、と訊くと、流石は勇者様だ、と言われた。これ何のネタっすか。

隊長の話によると、いま俺が出した黒い鉄パイプモドキは、極端に使い手が少ない闇魔法なのだという。闇魔法は非常に強力で、光魔法なんかは及びもつかないとか。曰く、最強。

闇魔法が最強たる所以は、魔法を打ち消す力があるのと、魔力を固化して変幻自在に操れるからと。

早くも俺無双フラグか？ 万単位の軍勢に俺1人で突っ込んでいくビジョンが脳裏に浮かび、ぶるりと身震いする。

冗談じゃない。俺の鶏心チキンハートがそんな刺激に耐えられるワケが無い。

俺がそんなことを考えていると、隊長は

「その棒を変形させてみてくれ」

と、鉄パイプモドキを指差して言った。どうやるんだと訊くと、頭の中でイメージしろ、と言われた。

変形、変形といっても、何にすればいいんだろうか。ただ形を変えるだけだから何でもいいのか。

よし決めた。『刀』にしよう。

頭の中で、いつかじいちゃんが見せてくれた模擬刀をイメージする。あれは綺麗だった。刃引きは切っ先だけされておらず、かなり鋭かった。

イメージを固めると、黒い鉄パイプモドキを頭の中で刀の形状にする。すると――

――床に落ちていた鉄パイプモドキは、うねうねと蠢き形を変える。最初はなんだかよくわからない形状だったが、徐々にそれは、確実に刀へと形を変えていた。

完全に鉄パイプモドキの動きが止まったとき、そこにあったのは、あの模擬刀そのままだった。色は黒いままだけどね。

「これは……凄いな」

隊長はなにやら感嘆の声を漏らしている。いや、俺もびっくりしたよ。

「……これ、持ってみていいですか」

隊長に訊いてみた。だって、刀は男の浪漫だもの。

隊長は頷き了承の意を示した。

震える手で、黒い刀を拾う。

そのとき、急に体から何かが抜けていく感覚が俺を襲った。俺の感覚と反比例するように、刀の雰囲気は力強さを増した。

「なん……だ……？」

吸われている。明らかに剣に何かを持っていかれている。魔力とやら、だろうか。

「くっ……」

刀から手が離せない。指を動かしたいだけなのに、全身の筋肉が動かない。

刀は、どんどん存在感を増していき、なにか刀身に黒い霧のようなものまでまとわりつき始めた。

このままじゃヤバイ。死ぬかもしれない。

ふっ、と意識が遠くなる。

死んでたまるか、と俺は思う。

いきなり剣と魔法のファンタジーな世界に召喚されて、今のところは自由も利かない。やっとファンタジーの片鱗を垣間見たと思ったら、次の瞬間には死にかけている。

死んでたまるか。その思いだけで意識を必死につなぎ止めた。

隊長は、どうする事もできない、と凄く申し訳なさそうな顔でこちらを見ていた。

周りで魔法訓練をしていた連中も、手を止めて俺を見ている。

死にたくない。死にたくないけど、どうしようもない。状況を、打開できない。

そう考える間にも、どんどん俺は力を刀に吸われていく。

ぼんやりとしか働かない頭で、ある策を思い付いた。今の状況を見れば不可能に近いが、やらないよりはマシだ。

刀を持っていない方の手から、にゆる、となけなしの魔力で作った闇の触手を出す。もう、残っている魔力は殆どない。

その触手を手から離れないように伸ばしていき、刀に近付ける。刀の纏う霧に触手が触れた瞬間、触手ごと魔力を吸い取ろうとするような力が襲う。だが、吸い取れない。吸い取らせない。

逆に触手をホースのようにして、刀が纏う霧を吸い取る。はは

っ、出来たぜ。

頼りない魔力で作られた触手は、霧を吸い取ったことで強度を増した。そのまま刀に触手を触れさせる。

——お！？ ヤバい、思った以上に刀の力が強い。このままじゃ、さっきの繰り返しだ。

刀に消されるかに見えた触手は、意外と拮抗している。もう俺は、手から魔力を吸収されていなかった。

「おおおおおお！！」

俺は気合いの声を上げた。

そのとき、絶妙なパワーバランスを保っていた触手と刀は、均衡を崩し僅かに触手が刀の魔力を吸収した。

触手は奪い取った魔力分だけ強さを増し、刀より優勢になる。

それから触手が、刀の魔力を吸い尽くすのに、あまり時間は掛からなかった。こうして俺は、九死に一生を得た。

魔力制御（前書き）

ちよつと勇者育成編に作者が飽きてしまいましたので、さくつと進めたいと思います。

魔力制御

周りから、歓声が挙がる。

ぬうう、こう言っちゃ悪いが、たったいま黒い模擬刀を必死の思いで消した俺はかなり疲れていて、正直この歓声は迷惑以外の何物でもない。

「大丈夫か！？」

流石に歓声は挙げなかった隊長が、声を掛けてきた。

「……ええ。ですが、なんだか疲れました。何なんですか、あれは」

俺が訊ねると、隊長は申し訳なさそうな顔になって答えた。

「闇魔法の暴走だ。……すまん、まだ魔力の制御も出来ない内にやらせる事ではなかった……。完全に私の失態だ」

そうだ、お前の所為だ。危うく死にかけたぞ。どう責任とってくれるんだ。

「あなたの所為ではありません。僕の過ぎた好奇心から起きた事故ですから。そんなに気負わないでください」

真っ黒な腹の中を隠し、笑顔が素敵な好青年を演じる。愛想笑いなら誰にも負けない自信がある。

隊長は、目を潤ませて言った。

「ゆ、勇者様あ」

キモい。マジで誰得。オッサンのこんな顔見たくなかった。

オッサンフラグが立ったかもしれない。脱出する前に押し折っておかなければ。

「その魔力制御とやらができれば、今のは暴走しないんですか？」

「あ、ああ」

よしやろう魔力制御。今すぐやろう。

「魔力制御を教えてください」

「しかし、君は今死にかけたんだぞ。危険では――」

「お願いします、教えてください。魔王に蹂躪されるこの国の国民の事を思うと、何かしなくてはられないんです」

真っ赤な嘘である。蹂躪されているのかどうかも知らん。

しかし隊長は、俺の心意気（爆笑）にいたく感激した様子で、結局教えてくれる事になった。

魔力制御訓練開始3時間後、俺は完全に魔力を制御出来る様になっていた。周りから、流石は勇者様だ、とか聞こえた気がしたがきつと幻聴だ。

そして、再び挑戦するのは例の模擬刀。今ならいける気がする。掌を前方に向け、集中する。やがて、またしても棒状の闇魔法が、にゅ、と飛び出す。

それを100cm程の所で意図的に切り、さっきの鉄パイプモドキと全く同じ形状にした。

鉄パイプモドキが床に落ちたのを確認すると、また模擬刀を頭に思い浮かべる。

鉄パイプモドキはまたしても奇怪な動きをして、黒い刀の形状に落ち着いた。

「今度こそ……」

ゆっくりと刀を床から拾う。

ぐっ、と魔力を持っていかれそうになるが、耐える。

魔力を全く持っていない事を確認した。

「やりました……！」

俺は感極まった様子で呟く。いや、内心は見た目程感激してな

いよ。

おお、とまた周囲からどよめきが起こる。隊長に至っては涙を流しながら「ご立派になられた」とか言っていた。隊長ウザい、ウザ過ぎる。

それから夜になるまでずっと刀で遊んでいた。そこで得た教訓は、魔力を使い過ぎると疲れる、ということだった。

ということで、俺はベッドの中に入ると泥の様に眠った。

十

次の朝、またしても謎の男に起こされた俺は着替えて食堂へ向かった。

食堂に着いて、飯を貰いにいく。なんか少し、ブローラーの様な気分になったが気にしない。

飯を貰ってなるべく人のいない席に着いた。そこでそれが与えられた仕事であるように、もそもそと飯を食べていると、隣の席に見覚えのある青年が座った。

「おはようございます。ベムさん」

見知った顔で、恩人なので声を掛けた。するとベムさんは、にかっ、と笑って俺に応えた。

「よう、マサト。昨日ぶり」

そう言ってベムさんは自分の料理に手をつける。グラトコロルスとかいう大層な名前の料理だったが、ただの卵と挽肉のそぼろ丼である。

ベムさんと色んな話をしながらグラトコロルスを食べた。ベムさんは聞き上手で、俺は故郷の日本の事を少し話した。だが、日本の科学技術などの事には触れなかった。下手な事を言って、科学技術が軍事転用されても困るしね。可能性は低いだろうけど、ここは異世界なのだ。慎重にならなければ。

飯を食い終わると、自らの足で魔法訓練場に向かった。今日は何をするんだろうか。

魔法訓練場に着くと、隊長に何か物凄く歓迎された。来なければよかった、と心底思った。

今日はどうかやら、細かな闇魔法の制御と、闇以外の魔法の訓練をするようだった。

隊長に手取り足取り魔法を教えてもらった。おかげで、闇魔法での『殺し』のテクニクや、炎と雷の魔法が少し使える様になった。なんか今なら国を相手に喧嘩出来そうな気がする。面倒だからやらないが。

そして部屋に戻り泥の様に眠……れなかった。部屋の扉がノッ

クされたのだ。

非常に面倒だが、仕方ない。扉を開けて、ノックの主を見る。

またしても、謎の男だった。

男は、この世界の宗教観やら軽い地理の説明、この世界の通貨、常識などを俺の頭に詰め込んで去って行った。何だったんだ一体……

次の日、俺は王様に呼び出された。

魔力制御（後書き）

モンハンの二次創作が書きたい。

冷酷無比な鬼畜ガンナーに憧れます。

真っ黒な誓い（前書き）

ちよつと遅くなりました。更新速度の向上はキツそうです。

真っ黒な誓い

現在、俺がいるのは謁見の間だ。今俺は、存在することに幾分の価値も見出だせない様な豚（もとい王様）に跪いている。

豚の背後には、精悍な顔立ちの青年と、ローブ姿の銀髪的美少女、修道服を着た蒼い髪の美女が控えている。

とうとう来たらしい。

——俺の魔王討伐の旅、その出発式。

豚の後ろにいる3人は旅のお供か。余計ことしやがって。逃げるにくなるだろうが、このぶたやろう。

そんな俺の心の中の悪態は届くハズもなく、豚はたらたらと長ったらしい口上を垂れている。やってらんね。

「王様」

面倒になった俺は、王様の話を途中で遮った。これくらい、今の俺の実力を鑑みれば許される事だ。

「どうした、勇者殿」

王様は特に気分を害した様子もなく聞き返してきた。

「お話の途中、大変申し訳ないのですが、私は今すぐに旅に出たいです。迫害されている民を想うと、いてもたってもいられないのです」

言外に、早く式をやめろ、と言っている。

「おお、勇者殿、そこまで我が国の民の事を……。余は感動した。では直ぐにでも旅に出てもらいたいが、暫し待たれい。いくら勇者殿とて、1人で魔王に挑むのは無謀だ。そこで、我が国からも優れた使い手を魔王討伐に参加させようと思う。……おい、フラット、シス、カーディ、勇者殿に自己紹介をしろ」

豚が言つと、豚の後ろに控えていた3人は俺の前に歩み出てきた。そして、精悍な顔立ちの青年が口を開く。

「フラット・ジョゼンだ。一緒に魔王討伐へ行く事になった。歳は17。よろしく」

「マサト・ヤマダ。歳は17。こちらこそよろしく」

そう言つて握手する。

フラットは、かなりやる気に満ちあふれている。俺の苦手なタイプだ。

次に、修道服を着た女性が口を開いた。

「カーディ・アコライトよ。僧侶をしているわ。歳は22。よろしく」

「「こちら」そよろしく」

そう言つて、握手。

次は、銀髪の美少女である。

「……シス・ライオネ」

実に無表情に、実に淡白に、実に気だるげにシスという少女は自分の名だけを告げた。

いや、やる気のありすぎる奴は苦手だが、こいつは酷いだろう。

協調性とか絶対に皆無だ。明らかにコミュ障だよ。

まあ、魔王とやり合うつもりがない俺としては嬉しい限りだが。

「よろしく」

笑顔で言うが手は差し出さない。どうせ握り返してこないで俺が恥かくんだから。

「準備は出来たか、勇者殿」

「ええ」

豚の問いかけに応える。

「城から出た所に馬車がある。フラットが馬車を扱えるから、それ

に乗って旅をすればよろう」

「ありがとうございます」

ちよつと待て。

——支度金は？

……嘘だろ、無一文で城の外に放り出す気か？

と、思ったら、僧侶のオネエサンが金を受け取っていた。まあいいや。取り敢えず預けとこう。

謁見の間から出て、城の外に向かう。城の廊下を、恐らく短い付き合いになるだろうお供達と歩きながら、俺は昨日謎の男に教えてもらったこの世界の金の単位を思い出していた。

——寝る間際だったのでうる覚えだが、たしか

『基本的にこの世界には硬貨しかありません。銅や銀だと複製される可能性がある、金だと作製にコストがかかるので、硬貨には特殊な金属が使用されています。なので、硬貨の製法を知っている者はほとんどいません。単位は

赤 ↓ 1 円 (日本円換算)
橙 ↓ 5 0 円
黄 ↓ 1 0 0 円
緑 ↓ 5 0 0 円
黒 ↓ 7 5 0 円
銀 ↓ 1 5 0 0 円
金 ↓ 5 0 0 0 円
白 ↓ 2 0 0 0 0 円
『

…… だったかな。

硬貨には色が着いていて、色によって単位が違うそうなの。小切手なんかもあるらしい。

考え事をしていたら、城の外に出ていた。

俺は金持ちになることを、異世界の抜けるような青空に誓い、1人ほくそ笑んで馬車の幌をくぐるのだった。

真っ黒な誓い（後書き）

なんかこのまま更新速度が下がっていきそうで怖いです。精進せねば。

推測（前書き）

ちよつと早く投稿できました。

推測

馬車に揺られて2時間、ようやく俺＋お供は、メノウ王国を出た。それなりに大きい道を通ったとき、勇者の出発だというのに城下町の人々の反応は醒めたものだった。まるで見慣れた光景を見つめるような、そんな反応。馬車の中のお供（シスを除く）の態度は、申し訳なさそうな感じである。

この様子から推測するに、やはり勇者というのは何度も召喚されているのだろう。何度も召喚されているということは、魔王は倒される度に短い周期でリポップ（再発）するか、もしくは――魔王に挑んだ勇者は全て魔王に倒された、従属させられたかだろう。

そして、俺という使い捨て殺戮マシン（勇者）が利用されることにフラットとカーディとやはら罪悪感を感じている、と。

……どうでもいいな。歴代の勇者が殺されていようといまいと、俺はこの世界で俺TUEEEEEEEするだけだ。

「魔物だッ!!」

その時、1人御者台にいるフラットの怒声が響いた。

幌から顔だけを出し、前方を確認する。成る程、馬車の100mぐらい先に虎のような生物が3匹いた。だが虎ではない。虎の尻尾は2本もないし、牙もあんなに長くない。

ということだ、

「フラット、お願いします」

前衛に丸投げした。

何も考えなしに行かせたわけではない。恐らくあの性格からフラットは好戦的だろう。だから嬉々として向かうハズ。

案の定、フラットは剣を片手に飛び出して行った。勇者のお供というからには、あんなモブっぽい奴に負けることはないだろう。

幌の中に首を戻すと、僧侶のカーディが苦笑いしていた。

「勇者さん……あんた意外と酷いわね」

それには答えず、ただにつこりと笑う。喋るのが面倒臭い。

「どんな魔物だったの？」

またカーディが訊いてきた。ちょっと煩い。

「虎みたいなやつですよ。尻尾が2本あるやつ。それが3匹いました」

カーディの顔が固まる。

「ちょ、ちょっと、それってツインテールタイガーじゃない!? フラット!?!」

いきなりカーディは叫ぶと、馬車を飛び出していった。危ない魔物らしい。あのカーディの様子では、フラットはもう生きて無いかもしれん。ちょうどいい。このままカーディも死んでくれんかな。

やがて外から悲鳴が聞こえてきた。フラット、カーディ、無念。

馬がやられちゃ厄介なので、虎を倒さなければ。

シスをちらりと見やると、興味なさげにしていた。ドライ過ぎる。

また幌から顔を出し、虎をみる。虎の後ろに見える赤いのは俺の所為じゃない。あいつらが勝手に飛び出していったんだ。

……虎の影に視線を集中し、そこから闇魔法を使う。影と夜は全て俺の支配域である。

虎は、影から飛び出した闇の杭に貫かれ、3体とも絶命した。

止まっている馬車から降り、ツインテールタイガーの亡骸の下へ向かう。魔物の素材は売れるらしい。

肉とかではなく、毛とか牙とか。

牙だけ取るのは面倒なので、闇魔法で首ごと刈り取る。首3つをリュックサックに入れて、カーディの遺体の腰（恐らく）に括り付けてある袋を拾う。ひっひっひ、金だ、お金ちゃんだ、うひひ。

ほくほく顔で馬車に戻る。豊作じゃ、豊作。

幌をくぐり、馬車の中に入った。シスは、やはり無表情で興味なさげだった。

……こいつは殺さなくても大丈夫か。

俺は、メノウ王国に密告されることを恐れている。カーディやフラットののような魔王討伐に乗り気な奴は、俺が逃げ出したら間違いないメノウ王国に密告するだろう。それは困る。行く先々の国で俺がお尋ね者なんかになってしまう可能性が、なきにしも非ず。

フラットとカーディは、ここで死ななくともいつか機会をみて殺すつもりだった。俺の自由な異世界ライフを邪魔する奴は、如何なる手段を用いても突破する。

血に染まったりユックサックをその辺に放り、どっかりと腰を降ろす。

——あ、御者いないじゃん。

重大な事実が気が付いた。

推測（後書き）

フラットとカーディには消えていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520y/>

今は勇者もダークサイド寄り

2011年12月5日20時15分発行